

# 住宅開発中止された あきる野・横沢地区

# 自然保護など4団体 保全活動でスクラム

里山と湿地の織りなす豊かな生態系が残るあきる野市・横沢入地区。JR東日本が昨年九月、大規模な住宅開発計画の中止を決めたことを受け、これまで計画に異議を唱えてきた自然保護などの四団体がこのほど、共同で「横沢入里山管理市民協議会」をつくった。各団体の考え方の違いをできる限り埋め、あきる野市やJRとの調整をはじめ、保全方法のルール化を目指すという。市やJRは「窓口が一本化されるのはありがたい」と歓迎している。

(龍沢 正之)

## 「里山管理市民協議会」を結成

横沢入地区は、雑木林の生い茂る緩やかな丘陵から地下水がしみ出し、様々な生物をはぐくむ里山や湿地が維持されてきた。オオタカなどがふれあえるゾーンと、今後の検閲には、開発予

力がなどの貴重な動植物が群生している。位置づけを改めたものの、定地約六十のうちの四十八を買取しているJRだけでなく、市民団体が加わる。将来的な計画は示していない。市都市計画課は異議を述べた。

## 市・JR「窓口一本化は歓迎」

横沢入は数年前まで水田や里山があり、住民による手入れがされていた。しかし、開発計画が持ち上がったことや住民の高齢化により、水田が耕作放棄さ

れて乾燥し始めているほか、雑木林の植生の多様性が失われつつあるという。このため、いくつかの自然保護団体がこの数年、雪害で倒れた木の除去や水防の整備、下草刈り、自然観察会の開催などをしてきた。しかし、団体によって保全の考え方や方法に対する考え方が違う。

市民協議会には、ムササビの会、伊奈石の会、里山遊歩、西多摩自然つおう会の四団体が参加。保全などの活動をしようとする場合は、どんなことをするのか、ほかの団体に示して調整したうえで、JRに知らせることにした。

JR側は「自然保護団体と協力していきたい」と歓迎する。

協議会世話人で、ムササビの会代表の中野勝さん(五十三)は「各団体がばらばらに動いているのは逆効果になることがある。互いの考え方の違いを理解して、共通認識を持てるようにしたい」と話している。

雪が残る横沢入。なつかしさを感じさせる里山の自然を味わいに、都心から訪れる人も多い。あきる野市・横沢入地区で

